大学版画研究会 会報 8

1981.8

▶ 第一回大学版画国際交換展によせて

吹田文明

毎年、夏に開かれる「大学版画展」に初めて、フランス・中国二ヵ国との交換展が開かれることになり大変喜こばしい。

大学版画研究会は、全国における大学の版画担当の先生方による研究、情報交換の機関であり、一般に版画の学会と呼ばれる種類のものである。その中で「大学版画展」は学生の自主的な運営をたてまえとしているが各大学に於ける版画教育の具体的な現状提示ともいえる。もちろん学生間の交流その他、学生と教師が一体となって版画教育を推進する行事でもある。

その大学版画展が国際交換展としての広がりを持ち得たことは大学版画展のこれからの一つの新しい展望である。

フランスからの参加はボザールの学生達で、昨年文化庁在外研修員としてパリに出かけた、会員小作青史氏のお世話によるものであり、中国は昨年、北京中央学院で版画の指導に当った会員、北岡文雄氏の紹介によるものである。いずれも委員会の決定によって、武蔵野美大の清水昭八氏が交渉の係りとして具体的に進められた。

中国は日本の方式を理解しており、全国五校ほどの主な美術大学の作品を集めて約50点を送って来る。日本側も交換展の性格上送られて来た作品と同数の学生作品をそれぞれの国にお返しすることになる。フランスは、ボザールのギャラリーで、中国は、北京中央学院を皮切りに出品各校を巡回することになっている。

大学版画展が前回までは日本の大学内に於ける現状提示であったが、今回フランス、中国、日本の三国間での現状提示となったことは大変意義深いものがある。

各国の大学は版画をどのような形で取り組んでいるのか、同世代の学生達がどのように版画を考え、制作しているのか、いろいろな関心と問題を提起するだろう。日本の学生の作品群も同じように、フランス、中国の各大学で関心と問題を提起することで、自分達の方向や自分自身の研究に多くのものを持たらすにちがいない。単に個々の作品の優劣の問題ではなく、それぞれの風土の中で、それぞれの教育の中で版画と言う共通のメデアを通して考えることは大変有意義なものとなるだろう。第一回の国際交換展の結果によって、他のいろいろな国の大学と、交換展を企画して行きたいと考えている。

また、大学版画展及び第一回国際交換展が海外の多くの方々の理解とご助力によって、開かれたことを深く感謝すると共に今後共のご協力をお願いする次第です。

●版画について(ヨーロッパで思ったこと)

小作青史

私は文化庁芸術家在外研修員として、1年間のヨーロッパ滞在から昨年1980年11月に帰ってきました。

帰国した当座も、なにかにつけてヨーロッパと日本との違いなどが目につき、無意識のうちに比較検討していた習慣が半年以上もたつと、それもしだいにうすれて行き、日本のテンポの早い生活に巻き込まれ、毎日をあくせく過すようになってきていました。

それが梅雨の季節に入ったとたん、そのものすごい湿気にあらためてヨーロッパとのちがいを感じているところです。

この気候風土の違い、特にこの湿気のあるなしが、文化のあり方の違い全てを説明できるのではないかと思われるほどです。

ヨーロッパに出かける前、私は素朴な疑問として、なぜ日本の「版画」にあたる独自な言葉がヨーロッパにはなくて、「印刷」という言葉と同意語であり未分化なのか。

それと、日本には版画だけを専門に制作している版画家がたくさんいるのに、ヨーロッパでは、版画家が少なくて、画家達の版画が多くあるのはどうしてなのかでした。

パリやドイツで美術学校や工房で制作や見学している内に、日本には「バレン」というものがあった事の大きな意味がわかってきました。

私は石版画から版画の道に入って、バレンを使った事がなかっただけにおどろきでした。

日本は明治になってからヨーロッパの印刷術を導入したことにより、それまですべての印刷物を刷り上げてきた合理的な機構がくずれ、バレンが版画の世界だけにとりのこされてしまった。

この断層から創作版画運動も生まれ、それにともなって版画という言葉も生まれてきたのだと思います。

ヨーロッパでは画家の版画が多いことは、版画を作るためにはプレス機を通さなければならないこと、そのプレス機は個人が持つわけには行かないほど大きくて重量があること、すなわち社会的な存在としてあることです。

そのために社会的に認められた画家だけが、エディター、画商や職人達を通してのみプレス機に近ずける。特に石版画の場合にそれを強く感じました。片手に持って使用するバレンとの違いは大きいと思います。

ヨーロッパ美術のなかで油画は、チューブ絵具とキャンバスが市販されるようになってから、それまで注文で画を制作していた画家達が主体性を持てるようになり、その事がヨーロッパ美術史のなかの近代が始まるひとつの条件であったのにくらべて版画の場合は、印刷する手段が個人では持てない社会的な存在物であることのために注文画の時代から飛躍できないでいるように思いました。

日本の場合、この湿気の多い風土にぴったりした和紙と水性木版とバレン刷りがありました。

現代の日本の版画の制作はバレンによるものだけではなくなっているが、この刷りの手段を個人が所有できたことの意味は大きいと思います。

プロだけではなく、義務教育の美術のなかにも版画が積極的に取り入れられ、日本人全てが、なんらかのかたちで版画を作った経験を持ち、社会のなかに広く定着していると思います。

このことが版画に対するヨーロッパと日本の根本的な違いになっていると思いますがどうでしょう。この広い地盤をより強固にするためにはどうしたら良いか、皆んなで考えて行きたいと思います。

●スペインの版画工房について

相笠昌義

文化庁の海外研修員として一年間スペインで過した。前半はマドリッド、後半はバロセロナに滞在した。画廊、美術学校、版画工房等版画に関係のある所はいくつか見る機会を得たが、バルセロナの有力な版画工房のタジェール・バルバラをのぞいた時の印象をかいてみる。工房主のバルバラ氏はミロの友人として知られており、ミロの版画を一手に引きうけている。工房は市の中心からややはずれた所にあり、近くにガウディの作ったグエイ公園、そして工房のすぐ近くにタピエスの住居もある。工房はモダンと云うよりうすぐらく雑然としている。壁に雑にピンでとめてある若い男や老人をかいたデッサン風のリトグラフがあった。良い作品だなぁと思って近よってみると若い男はコクトーで老人はココシェカをかいたピカソの作品だった。また工房のすみにころがっているうすよごれた厚紙が、なんとタピエスの原画とかで雑然とした工房のすみに投げ出されているとまったくガラクタにしかみえない。ここではどんな高名な作家の作品もまるで大切げがなく、なげすてるようにおいてあるのは面白い。

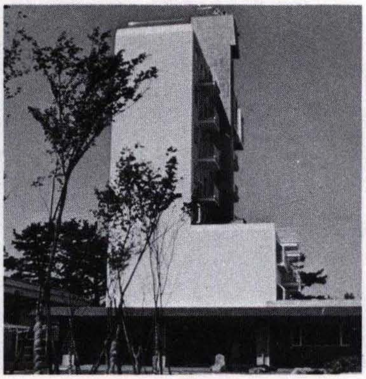
主人のバルバラ氏に会い話しをきく。バルバラ氏はするどい感じのなかなかダンディな老紳士だった。彼はパリで修業したとかでフジタも友人だったと云っていた。ここではミロ、タピエスを中心にヴァザルリ、ヴォイスなども刷っていた。タピエスは近くに住んでいるせいか気軽に顔をみせるとか、こちらの刷師は日本で想像される以上に作家の制作に参与している。バルバラ氏はミロとは特に親しいとかでまったく信頼されているらしい。彼の息子も刷師として働いているが、二つの版を持ってきて見せてくれた。これはおやじの描いた線だ、これはミロ自身の描いた線だ、どうだと自慢気に見せてくれた。まったく区別がつかない。タピエスの制作方法やヴォイスのまるで幼児のいたずらがきのようなエッチングも見せてくれた。工房を見学した後彼の事務室に案内されてミロやタピエスの人柄などもきく。話しの合間におもむろにひきだしから二枚の作品写真を出して私に手渡した。これはミロだ、これはタピエスであると云う。どうも感じが違う。すぐ種あかしをしてくれた。一枚は壁に描かれたラクガキであり、もう片方は古ぼけた板のとびらの写真に過ぎなかった。スペイン人特有のユーモア、いたずらっ気と云うより影の存在にしか過ぎない刷師の悲哀、皮肉もこめて見せたのかもしれない。バルバラ氏はミロの最近の写真も見せてくれたが我々がよく雑誌などでみなれている小太りの陽気なイメージではなく、暗いイメージのやつれた老人でショックをうけた。私の滞在中ダリも大病でいつ死んでもおかしくないような報道のされ方をしていた。現代美術におけるスペイン作家のかがやかしい栄光も、もうたそがれに近い。もう一つの工房、タジエール・バリラナものぞいたが、ここはスペインの中堅作家、ジュアン、ポンス、カスティーリョーなどの銅版を主に刷っている。いろいろ使う溶剤もきいたがすべてスペイン名なので、まるでどのような種類か見当はつきかねた。

▶ 各大学版画研究室

大阪教育大学　朝比奈逸人

大阪教育大学は現在、天王寺、池田、平野の三分校に分かれていて、美術学科は池田分校に、その二部は天王寺分校にあります。池田市は大阪市の北に位置し、水と空気のたいへんおいしい所です。美術学科は絵画、工芸、美術理論の三本の柱のもとに、さまざまな講座が開かれていて版画もそのひとつです。そして学生は三回生までに、今年度から実施されている新カリキュラムに基づいて学習し、四回生になって自分の望む専門の講座り入り卒業制作をします。その新カリキュラムは、美術を講座別に学習・研究するのではなく、ジャンルを超えて最も基本的な、平面、立体、理論の三つに分け、そこに各講座の教官が関わってゆくというシステムで展開され、それと平行した形で専門の講座が開講されます。版画は二回生で銅・石版を学び四回生で孔版を学びます。しかし週一回100分の授業ではなかなか思うような授業展開はできず、機材やスペースの問題もありむずかしいものです。四回生になって卒業制作に専念しようとしても教育実習のために2ヶ月が充てられ、教員採用試験もあって、その一年で専門として深めるためにはかなりの努力が必要です。美術教育の場に立つ者は単に美術の方式を教えるのみならず自らも美術家としての創造者であって欲しいと願っても実情としてはなかなか複雑な問題をはらんでいます。美術学科は一学年50名で現在版画専攻の四回生は八名と研究生が一名で、版種別には銅版五名、石版二名、孔版・木版各一名です。そして同じ美術を学び研究するのでも、美術大学とはまた違った、教育大学としての特性を生かした美術教育・版画教育を考え、推進してゆく場にしたいと考えています。

▶ 全国美術大学版画展



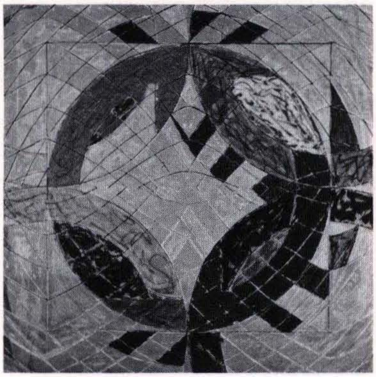
全国美術大学版画展開催について　坂田和之

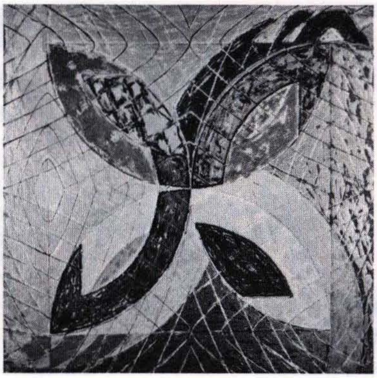
会期 — 昭和56年9月10日(木)～9月27日(日)
am 9:30～pm 4:00(会期中無休)
会場 — 常葉美術館・静岡県小笠郡菊川町半済1550
国鉄東海道線菊川駅徒歩10分
東名菊川インターより3分
主催 — 常葉美術館・常葉学園短期大学
美術・デザイン科研究室
後援 — 大学版画研究会・日本版画保存会
入館料 — ￥100(学生半額)

常葉短大美術・デザイン科研究室では昨年6月頃より版画保存会から作品を借用し版画展を開催すべく企画を練り、この度「全国美術大学版画展」として展覧する運びとなりました。ご承知の通り毎年行なわれている大学版画展の買上げ作品の中から第1回展、第3回展、第5回展の約80点程の作品を展示するものです。

会場の常葉美術館はキャンパス内に四年前建設し、以来春と秋の2回を毎年特別企画展として催しております。当館では美術作品の生きた教材として学生、一般の芸術に対する認識を高め、相互に研修し刺激しあう場としての目的をもっております。今回の版画展の企画目的もまさしくその意に沿ったものですし、また、大学版画研究会の主旨にも合致するところであろうと思われます。第1回展から第5回展までの変遷をまとめて展覧するのは今回初めてであり、その機会を得たことは今後の版画教育、及び広い意味での美術教育の運動を展開していく上で重要なことと思われます。

今回の版画展準備に於いて幾多の問題点も出ておりますが吹田文明、伊東正悟両先生と日本版画保存会のご協力を得て実現可能となったことは喜ばしい限りです。何卒皆様にご来館頂きたく、会報をお借りしご案内申し上げる次第です。尚、ポスター等は8月頃配布の予定でおります。





F. STELLA, "POLAR CO-ORDINATES FOR RONNIE PETERSON" 私的雑感

山本富章

Bird series を70年半ばから取り上げて来た、F, STELLA の Relief painting は、PATERN 或いは NEW IMAGE と呼ばれる、新しい動きと呼応する様な形で、我々の眼に、ますますその装飾性の強いものとして触れる様になった。その力強い美しさは、STELLA の版画の世界をも拡大し、Lithograph で作られた、Sinjelri Variation による版画の色彩のあざやかさは、Sinjelri series のタブローのペイントフイルムの持つ物質的なものとは違って、ある種の優美さをも見せているが、この Polar co-ordinates に到っては、職人芸的なものに裏打ちされたヨーロッパ版画の流れの中にあるものとは異なり、Factory work のプロジェクトとして、数多くのプロセスを経て —— Lithograph, Silkscreen, Letterpress 等の技法で37～52回の刷り ——自分のスタジオに版画の工房を持つ STELLA が、第1刷の線描、それは四つ葉文様をイメージするドローイングによって作られたもの……に次々と色彩のトライアルの為のプルーフを繰り返し、あるものは放棄されながら生み出され、事実、STELLA がサインし、コレクターに贈ったものからは全く別の姿となって、時を経た後、Polar co- が完成した。この前に作られた、Bird series による版画は、その為のドローイングから手順を送って作られ、その中のあるものは、結果は若干異なった色彩となっているものも見られるが、それとてドローイングに従属する形にとどまっており、Polar co- では、メタリックな色彩は、前作と比較にならない程、肉厚、複雑化し、おそらくはその為のドローイングと呼べるほど明確なものは見られずに、約3年の時間の試行錯誤の後に、版画というプロセスを経たタブローとでも呼べる様な作品となったのではないだろうか。

STELLA 自身、GELHAAR とのインタビューの中で語っている様に、さまざまなワーキングドローイングが繰り返されながら、Sinjelri series と Bird seris を一体化した作品、この Polar co- が生み出され、この計画の途中、78年9月に死んだ、友人のドライバー、RONNIE PETERSON にささげられたのである。スピードの象徴であるホイールがその円形の中にも意味されているという。

Bird series が STELLA の一大転換期と感じていた私にとって、この Poiar co- が、Black painting への回帰を呼び起こす様な印象を与えている気がしていたのだが、STELLA の、そのアルミハニカムによる Relief painting は、放棄されるのではなく、更に複雑な様相を見せ始め、現在進行中の最も新しい作品群では、カットアウトされたハニカムにはもう一層メタルが接着されており、それを腐蝕し、その上に彩色が施されているという。次に STELLA が版画に着手するとしたら、どんな作品が生み出されて来るのか、想像もつかないのである。

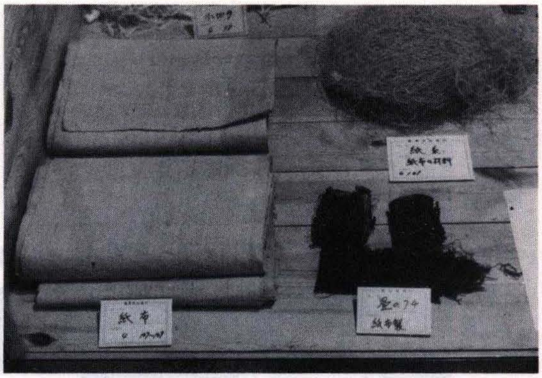
(原注)

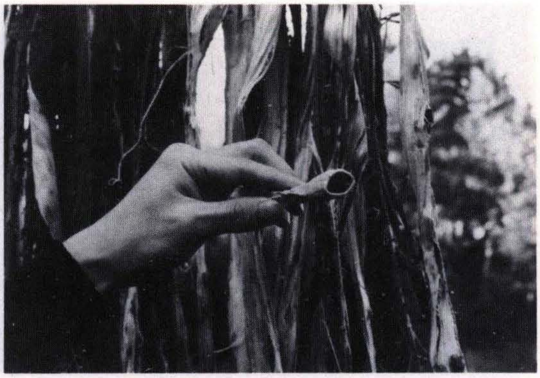
◎ FRANK STELLA , 1980
POLAR CO-ORDINATES FOR RONNIE PETERSON
SIZE　98×96.5
Ed.　100
PETERSBURG PRESS　8枚組

◎ FRANK STELLA , 1976-77
bird series と呼ばれているもので各々にタイトルがつけられている。
SIZE　86×116.5
Ed.　50
TYLER GRAPHICS LTD.　6枚組

上記2つのシリーズについては MIXED MEDIA PRINT と技法についてのコメントがある。

▶ 和紙研究シリーズ 2





波佐民族資料館

小山松隆

大佐山を越えると、島根県那賀郡金城（カナギ）町波佐（ハザ）地区に入る。蛇行する坂道を下る。カーブごとの「強風に注意」という回転板が風に煽られクルクル回る。大佐山から20分すぎたろうか、ゆるいまっすぐな坂に変わった。両側に小高い山が連なり谷間の農村風景が飛び込んできた。少し進むと左側の田起しが始まった。田の中に白い鉄筋の建物と道を隔てた高台の白い倉が見えてきた。通り過ぎながら二年前を思い出していた。あの時は浜田から逆方向に国道186号線を登ってここに着いた。12月末の重い雲が山陰高地の冬の厳しさを感じさせていた。この波佐に建つ「波佐民族資料館」はめったに人が訪れないらしく、館員が慌しく電灯をつけてくれた。この資料館には、国指定重要有形民俗文化財「波佐の山村生産用具758点」が収められ、その内、紙漉き用具110点が保存されている。現在、各地の和紙産地の紙漉の方法は、明治の西洋文化の移入により、機械漉の洋紙との競合の中から産まれてきたものといってよい。吉野和良のような特殊な和紙をのぞけば、古い紙漉の形がそのまま残っている所は少ない。少ないというよりも、洋紙との競合に敗れて途絶えたといえるだろう。この波佐地区の紙漉も昭和32年を境に終焉を迎えた。しかし、古くからの製紙法が形を変え、資料としてこの資料館に残っている。110点の紙漉き用具とともに、昭和46年12月から昭和47年2月まで、旧紙漉技法による「波佐の紙漉き習俗の再現」の記録と紙布製作の工程である。紙布は現在、民芸品として津和野などで売られている。しかし波佐では、「こでなし」「田袴（タバカマ）」「どてら」など実生活に必要な衣類を自らの手で作っていたのがよく理解できる。紙布用の和紙の製法は最も高度なものであり、流漉の極致といえる。残されたその和紙のチリひとつない地合の良さと美しい光沢は今でも目に浮ぶ。この美しい和紙が、生活様式の変化とともに途絶えてしまったのが残念でならない。吉野和良と同じように古い特徴のある伝統的な製紙方法であった。

この波佐を含めた石見地方の紙漉は、国東治兵衛の「紙漉重宝記」に詳しい。この中の「同カハ(楮皮)を剥く図」にイラストの婦人が子供にかたる言葉に「こんな子よ　むくなら　をらがやうにもってむけ　やあれ　そふないと　ひがし石見のごとすぼむき　になるぞ」とある。この文中、「すぼむき」とは黒皮剥きのことである。この著者治兵衛は、現在の益田市で紙問屋をしていた。この地区の楮の皮剥ぎは、「白皮剥ぎ」「スッポン剥ぎ」という独特な剥ぎ方である。浜田藩領であった益田市からみて東というから津和野藩領であった波佐を含めた山間部をさすのであろう。同じ石州半紙の産地でも多少の違いがあった。このような違いは簀（す）にもみられる。治兵衛の書には「竹の簀、竹を水引の如く能（よく）々けずり馬の尾を以図のごとくこしらゆる也」とあるが、資料館の向いにある「たたら倉に保存されている江戸時代の大福帳の紙にはハッキリと茅簀の跡が残っていた。波佐は明治22、3年頃に茅から竹簀に代った。

この石見地方の紙漉は現在、三保三隅に国指定無形文化財「石州半紙」として7戸残るばかりである。

◀ヘッセン州立美術館

ヨーロッパ一瞥の記　吉田　東

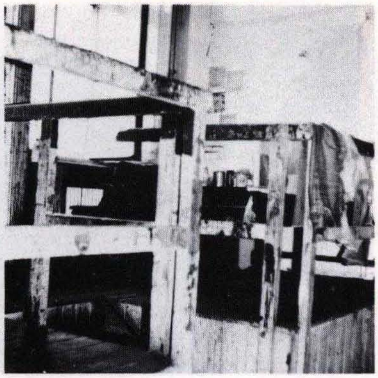
周到なスケジュールに便乗して終始楽天的なポーズで観て歩きをさせていただいた贅沢な洋行でした。ですから積極性に欠け、先人の情報以上の体験を得ることはできえなかったのですが、旅行記などとんでもないことですが感謝の意味をこめてはずかしながら唯一の独断的観察をご披露いたします。

旅行も半ば過ぎ、ケルンに着き相変らずの美術館参りのため宿を出、目印である大聖堂を求めて空を仰ぎみながら歩いているとビルの相間に大きな聖堂があらわれ「やにすんなりみつかったものよ」、「大部なれてきたわい」と地図をひろげて見るとあまりにも宿から近すぎる。しかし大きな聖堂だし……とここでとたんにオノボリさんに変身「あれは違うのではないか」との意見のもとにままよと歩くと「ありました、ありました」雲つくような小山のような大聖堂!!とりあえず美術館に直行、カタログ等買い求め、二,三の画廊を巡り、朧げない通訳と洋行の戦利品を求めさまよい歩き迷い出ました大聖堂、この際、先の感激もあり中に入ってみる。中は嘘のように静かで、やれやれと腰をおろしてみるとまるで整然と木立の並んだ深い森の中にいるような気分、そこで今回初めてもの思った訳です。このゴチックの柱はウィーンの森の木立だ、アウトバーンから見えた森だ、窓からの光は木立からのこぼれびだ。今まで観てきたステンドグラスは木立の間に垣間見ようとした天使達の世界にちがいない。森を必要とし、森の中に暮した風土から出た自然の姿になのだ。勝手に思いを巡らし外に出てみると行き交う人々が陰々滅々とした顔で憑かれたように行き交い、まるで地獄に出て来たような気がし「この大聖堂は街の中に森を造ったのだ」と思ったものです。

ウィーン美術学校記　梅沢和雄

冬でも芝に青さが残っていたロンドンの高いビルとは違ってウィーンの空港からホテルへ向う夜の町並は闇の中に低く立ち、長旅びで睡魔とたたかいながらぼんやり頭の中に浮かんできたのは、華やかに奏でる楽団のメロディーでなく、チゴイネルの淋しいチターの音色だった。車窓からの闇の風景がさらに輪をかけた様だった。

三、四年前に芸大へ留学していたアルフレッド・ロッシーさんが卒業したというウィーン美術学校へは、中林先生のコンタクトで行った。青く晴れわたった空の下で、古く輝く建物を正前に、ぶ厚い門を開けて入っていくと、外の明るい日射しとは対称的に建物の中は薄暗く、その古さのためにカビくさい。日曜日だったために学内は閑散としている。それでも中林先生が来るためにか学生が四、五人、異常に高い天井の下で仕事をしている。その中で特に、チロル出身だという学生が日本に興味をもっている様で、中林先生に質問をしていた様だ。天井が高く薄暗い部屋の壁には、版画インクをヘラでこすりつけたあとが無数に、余白なくある。それがほこりをかぶり、また、その上にかさねられて厚く層が出来てしまっている。所々にまだ新しいインクのあともあった。それほど広くない教室と感じたが、よくよくみると天井が高いためにそう見えるだけで実際は広い様だった。そして我々来客の位置よりはるかに高い場所で制作できる部屋の仕組みは、ロンドン、パリにはなかった、もう一つのヨーロッパ気質を見た気がした。床の位置が、我々の居る位置ともう一つ、中二階ぐらいの高さに制作用のスペースとして確保されてあり、ただ教室に入っていっても壁と階段が見えるだけで、学生ははるか上で仕事しているといった具合でした。つまり、それぞれの学生の仕事場の所有というものが完璧に区別され、さら



に、その精神も完璧にちかいほど独立されているのである。個人の存在を重要視し、個人の追求みたいな徹底したものが、単に国がらの違いだけでなく、文化、風土、さらに根源的な民族の血が、何かどうしようもないところで出ている様な気がした。これほど我々にとって完璧でなくても、ウィーン郊外にあるクルト・ザァインさんの版画工房で先生から聞いた、学生同士の情報の交換が少ないと言う問題はあるにせよ、個人の対立が激しくぶつかり合う精神と、その場がある良さは、まだ学んでいくべきものだと感想をもちました。

ヨーロッパ美術研修旅行、雑感　梅津祐司

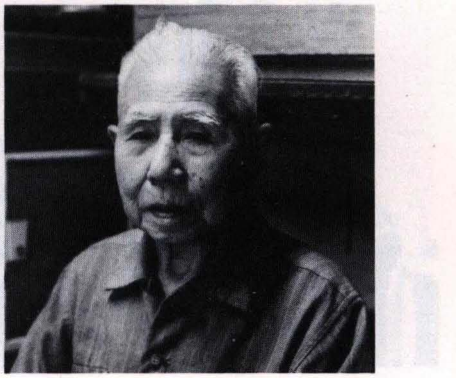
始めに着いた所はロンドンはど真ん中、朝早く着いたのでホテルにチェックインは出来ない、寝不足と疲労の中でホテルに荷物だけ置かせてもらい、空港からホテルまでのバスの中でもらった地図をしっかりと持って、朝早いロンドンの町へ出発することにする。

ロンドンは噂通りに霧雨が降り、冷たい風が吹く。まずは地下鉄（チューブ）の切符を買う。みんなドキドキしながら、中林先生の買方を見ている。先生のいった通りの発音でみんな切符を買っていく。切符が手に入るまではみんな真剣だ、切符が手渡されると、みんなホットして、目線が合うと、ニヤッと笑って見る、こうしてヨーロッパの第1日目が始まったものだ。

美術館は昼から夕方までよく廻った、どのような絵を、どのくらい見たか忘れるくらいによく廻った。ヨーロッパの美術館は、フラッシュを使用しないかぎり、大方は写真を写してもかまわない。私は、じゃまになると思い、小型のポケットカメラを、わざわざ買って持って行ったのが仇となり、シボリやシャッタースピードを調節することが出来ず、写した絵や道具などの資料は大方無駄になってしまった。

印象に残っている絵は多いけれど、特に驚いたのは、ウィーン美術史美術館のブリューゲル、大きな作品が室一杯に掛けられ、その巧みな構図には、画集では伝わらない本物のよさがあった。

デンハーグにあるマウリッツホイス美術館のフエルメールのデルフト風景には、ただただ呆然とするばかりの画家の目と技術を感じた。フエルメールは他の誰れにもまねの出来ないマチエールと目を持つ作家であった。



金太郎刷毛

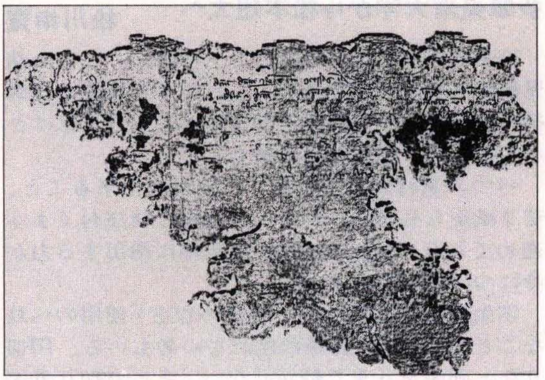
小山松隆

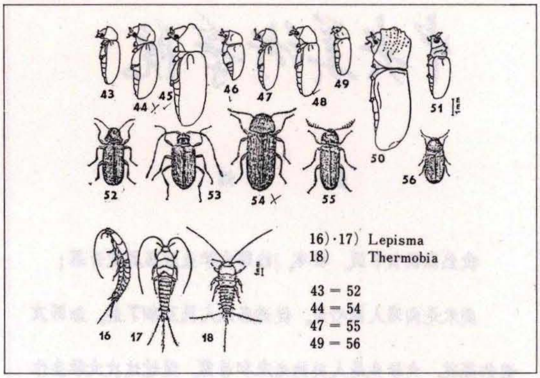
まだ木造校舎だった芸大版画研究室２階の部屋に二つの人垣ができていた。右側の輪には、80前後の老人が、手前に傾斜した台に向かい、小さな板に柄の短い小刀を握って男の顔を彫っていた。もう一方の輪の中心には、60才になろうかと思われる老人が版木に墨をのせ、薄黒く染ったブラッシで、全面にそれを素早く広げては紙をのせ摺っていた。その二人の老人が彫師の大倉半兵衛さんと摺師の内川又四郎さんと知ったのは数年後だった。その頃学部の二年だった私は、内川さんが使っていた掌程のブラッシに、青春を傾けて開発した人がいるなど知る由もなかった。

野潟さんのお宅は、地下鉄日比谷線入谷駅から4、5分程の入谷町南公園の前にある。お会いするなり「明日から入院するので今日でよかったですよ」と、とても病人とは思えぬ血色のよい顔でおっしゃる。目の手術をなさるそうで、二週間の入院とのことである。二時間程のインタビューを要約すると次のようになる。

野潟さんは明治30年５月８日生まれで、現在84才である。刷毛を作り始めて72年になる。版画の刷毛をてがけたのは23才頃であった。その当時版画用の刷毛は、手刷、稽古本の摺りにもちいる櫛形などを使用していた。専門にそれらを制作する人がいたわけではない。利潤の高い経師用の刷毛に打ち込む職人は多くいたが、利潤の少ない版画用の刷毛に取り組む人はいなかった。野潟さんは古い伝統を受け継ぐ浮世絵の摺道具が粗末なのを憂慮し、それまで様々な刷毛を作っていたのをやめて本格的に版画用刷毛制作に着手した。まず摺師の仕事場を個別に尋ねて意見を聞き試作を繰り返し、徐々に改良した。現在、私等が使っているブラッシ刷毛が野潟さんの考案した形である。はじめは摺師の好みによって刷毛の作りを変えた。しかし時と共に野潟さんの気持で作った刷毛に統一された。ではこの刷毛の特徴はどこにあるのか。最大の長所は、刷毛運びが軽い。このことは、長時間摺りに従事する摺師にとって疲労感が少なく、早く摺れる。また絵具の乗りもよい。甲羅を厚くし側面に浅い丸溝を彫りつかみやすくした。甲羅を一定の間隔に穴を開け銅線で毛をつりあげ固定する。穴は外廻りを内側よりひと廻り小さく開ける。太い穴だと穴開けの最中に甲羅が割れる恐れがある。ブラッシに使う材料と制作手順はどうであろうか。甲羅は桂、朴の柾目が良い。板目は時に中心から割れる。甲羅に穴開け用の型紙で印を付け特殊な錐で、毛を差込む側を太く、銅線でつりあげる側を細く、紡錘状に開ける。切り揃えた馬の尾毛を銅線で５ミリ程穴につりあげる。馬の尾は国産品を使う。昔は銅線の代りに毛繩を使っていた。毛繩は髢(カモジ)を撚り糸にしたもので、銅線より弾力があり質も良い。（毛は湿度に敏感である。刷毛全体が水を含み膨張すると、毛繩も膨張する。刷毛が乾燥すると、毛繩も縮み、元の締りにもどる。銅線は伸びたままだから毛が抜けやすくなる。）銅線で固定し終ると上ぶたを乗せ銅釘でとめて完成である。しかし現在、これを作る人がいない。

野潟さんが版画用の刷毛作りに青春を傾けた時代は浮世絵版画の盛隆期はとうに過ぎていた。しかし、考案した刷毛は「摺り」の技術を向上させた。水性摺りの木版画が存続するかぎり、このブラッシ刷毛の生命は続くであろう。





版画保存について

小林基輝

版画が複数制作であるメリットは種々あるだろうが、数年後あるいは数十年後に同じ作品の保存状態による違いを明確に知ることが出来るというのも、ときとして大変貴重なことであろう、—それゆえ他の分野の作品と異って、保存状態が作品の価値に直接結びつくというのも版画ならではのことである。

かって版画は書物の内部に鎮座し、空気、光、塵埃から保護されてきたといえるが、現在ではむしろ額装され、展示される場合の方が普通である。しかし、その素材が耐光、耐湿性を考慮して作られているとは考えにくい。わずか数年で変色した版画の修復を依頼される場合があるが、このようなケースは保存の問題というよりむしろ素材選定に難点があると考えられる。

版画作品のトラブルには、褪変色、チョーキング、剝離、フォクシィング等のような素材からもたらされるものと、保存の悪さが原因の黴の発生、物理的損傷及び虫害や額装によって引き起こされる種々の幣害等がある。それらの中で特に修復も困難でありしかも大いに美感をそこなう、チョーキングや剝離を引き起す原因と、虫害について述べてみたい。

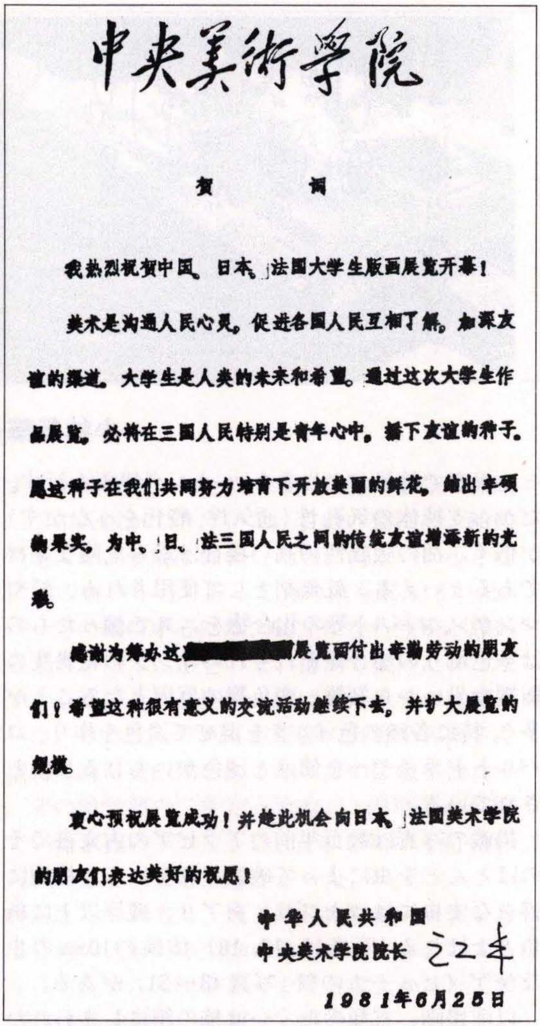
チョーキングを引き起す原因はインク自体の乾燥に密接なつながりがある。水性絵具の乾燥は、水溶性の天然樹脂（アラビアゴム・タラカントゴム・膠等）の中に浮遊する顔料及びレーキが水分の蒸発、侵透によって樹脂の力で表面に固着するが、油性の絵具はインクベヒクルの支持体内部への侵透と、残存樹脂の酸化による顔料、レーキの固着によって乾燥する。その為に支持体の吸着性が余りに強いと（新聞紙のように）インクベヒクルと共に樹脂分も紙中に侵透し、顔料、レーキが単に紙表に付着している状態となり、布や手でこすった程度で絵具がとれるチョーキング現象を行す。だから支持体の気孔性（通気性、酸化をうながす）が低く、油の吸収性の高い場合は最も危険な素材であるといえる。乾燥剤として使用される、鉛やマンガン、コバルト等の化合物をニスで煉ったものは多色刷りの場合等それぞれのインクの乾燥度の極端な異いから剝離、変色等の原因となることが多く、特に各種の色インクを混ぜて淡色を作り、コバルトドライヤーを使うと褪色がいちじるしいとされている。

掲載の写真は数百年前のアラビアの古文書でそのほとんどを虫によって破壊されている。絵画に害をなす虫にはゴキブリ、白アリ、蠅等以上に紙魚とよばれる（写真16. 17. 18）体長約10㎜の虫及びアノビュームの類（写真43～51）がある。

以前書画、衣類のたぐいは楠の箱にしまわれたが、楠は防虫剤のショーノウの原料であり通気性もあって理想的な保存ケースでもあるが、今日では、秀れた防虫、乾燥剤があり、それらの虫を保管庫に発見したら、すみやかに処置をほどこすことで上記掲載の写真の結果のような被害をこうむることはまず無いだろう。注意深く観察すれば保存はそれほど難しいことではないように思われる。

良い絵具は各自工夫研究することが必要だろうし、良い支持体も各自の工夫によって未然にその幣害を防ぐことが可能だろう。絵具とその支持体は全く不可分の存在であり、しかも大量印刷を目的に研究された速く、安く、美しくの為の今日的素材は恒久的作品の保存を考えると、疑問の多いもののように感じる。

▶第一回大学版画国際交流展


中央美術學院

贺　词

我热烈祝贺中国、日本、法国大学生版画展览开幕！

美术是沟通人民心灵，促进各国人民互相了解，加深友谊的渠道。大学生是人类的未来和希望。通过这次大学生作品展览，必将在三国人民特别是青年心中，播下友谊的种子。愿这种子在我们共同努力培育下开放美丽的鲜花，结出丰硕的果实，为中、日、法三国人民之间的传统友谊增添新的光彩。

感谢为筹办这[redacted]展览而付出辛勤劳动的朋友们！希望这种很有意义的交流活动继续下去，并扩大展览的规模。

衷心预祝展览成功！并趁此机会向日本、法国美术学院的朋友们表达美好的祝愿！

中华人民共和国
中央美术学院院长　江丰

1981年6月25日

中華人民共和国
中央美術学院長　江 豊 氏よりのメッセージ

第一回大学版画国際交流展

第一回大学版画国際交流展は第六回大学版画展と同時開催の形で丸の内画廊で行なわれることになりました。今回はフランス国立美術学校の石版画教室、銅版画教室のリトグラフ、ビュランの作品54点と中国より木版画を中心として、北京中央美術学院、浙江美術学院、広州美術学院、西安美術学院、四川美術学院、藩陽魯迅美術学院、天津美術学院の50点の参加です。

日本からは展覧会終了後大学版画展より選抜して、フランスに54点、中国に50点を送り、フランス美術学校、中国の各地で展覧会が行なわれる予定（期日・場所は未定）です。なお出品した作品は各国と交換することになっております。

中華人民共和国、北京中央美術学院長江豊氏よりの展覧会賀詞が届きましたので原文のまま掲載いたしました。

▶通信覧

多摩美術大学から松本短大へ　松川幸寛

松本短期大学に赴任して3ヶ月余り。ここは幼児教育者養成の場である。したがって版画とは直接の関りが少ない図画工作が中心になり、私にとってまったくの新しい経験をしている。

一つの素材からでも多くの表現が出来ること、切り紙から孔版画へのように版画と結び付くよう進めており、学生達が素材を自由に活用する力が身につけばと思っている。

学生達の道具（ナイフ、はさみなど）使用のへたなことで、聞けば鉛筆の削れない者もいる。円切りなど両手をうまく動かせない。そこで切り紙表現では、直線的切り込みのパターンが多くなる。生活環境の変化で親達の道具使用がへり、見る機会が少くなった結果なのだろう。何か気になる。

高橋貴和氏

宮城教育大学助手を辞して宮城県立美術館学芸員となられました。尚、今後も一般会員としてご協力をお願い致します。

岡部徳三氏

東京芸大を3月に退職し一般会員となられました。今後もご協力をお願い致します。

名誉会員

●東京芸術大学　平塚運一先生、松田義之先生、伊藤廉先生、脇田和先生、小野忠重先生
●多摩美術大学　福沢一郎先生、未松正樹先生
●武蔵野美術大学　村井正誠先生、田中忠雄先生

以上の諸先生方が名誉会員になられました。

小磯良平先生、女屋勘左衛門先生につきましては未だご承諾が得られて居りません。

新会員

青山光祐（山形大学）、朝比奈逸人（大阪教育大学）、奥定孝一（愛媛教育大学）、久保卓治（多摩美術大学）、小林次男（東洋美術学校）、佐藤逸平（日本大学芸術学部）、高山登（宮城教育大学）、山下哲郎（九州産業大学芸術学部）、山田節子（兵庫女子短期大学）、山中現（東京芸術大学）、若生秀二（東京造形大学）の諸氏が新たに会員になられました。

研究会の連絡会議（例会）の開催日、時間等について地方よりの出席ができやすいようにして欲しい旨の問合せがありました。事務局としてもできるだけ配慮し、多くの人が参加できることが望ましいわけですが、担当校の事情（場所の確保）や授業終了後などすべて一任している現状です。

▶経過報告

●昭和55年7月28日、総会、大阪フォルム画廊。
●会報について—会報8号より福岡奉彦氏が会報係に加わる。美術館へ会報を事務局より発送する。
●大学版画展顧問、小山松氏から7月5日、学生代表者会議の報告。搬入係—愛知芸大、搬出係—武蔵野美大（搬出にこれない大学は、武蔵野美大が受け取り人払いでその日に発送する)。展示係—多摩美大、創形美術、目録係—東京芸大、オープニング係—女子美大、スライド係—日大、懇親会係—造形大。
●大学版画展については今回で第5回を数えるが、今までの反省、よりよくする為の意見が出された。
●オープニングの招待状を会員、賛助会員、マスコミ関係へ発送する。
●展覧会の運営が事務局だけではうまく運営できなくなって来ているので展覧会委員を作ってはどうか。
●フランスの国立美術学校から学生の作品交換展の話しがあるがどうするか。
●和光大学から、カタログを作って欲しいとの要望あり。
●地方大学のために、額がそろえられれば地方の学生は助かるとの意見が出た。
●4時より買上げ作品の選定が行なわれた。
●買上げ者32名、各2点、計64点が決定。会議終了後、第5回大学版画展オープニングパーティーが催された。出品校29校、114点が出品展示された。
●昭和55年11月6日、運営委員会、東京芸大にて。
●大学版画展について—東京だけでなく、発表会場を変えも良いではないか。その為には関西の大学などその地区の会員により展覧会係を作ったらよいのではとの意見がでた。
●大学版画展の運営委員を作ることについては、今までの方法が一番良いとの結論がでて、あとは学生の能動的態度により運営の改善を計ることとなった。
●静岡県常葉学園短大から昭和56年9月、過去の大学版画展買上げ作品の展覧会をやりたいとの要望があった。
●カリキュラム委員、運営委員を変えることについては現状維持となった。
●会報委員を次回から東京以外に回わしてみたらについては、京都あたりにもっていったらどうかとの意見にまとまる。
●名誉会員依頼の文を全員で承認する。
●昭和55年11月27日、連絡会議、東京芸大にて。
最初に筑波大学の白木俊之氏が紹介された後、小作、相笠両氏のヨーロッパ研修からの帰国のあいさつで始まる。
●今年度会計報告が鎌谷氏より行なわれた。
●大学版画展の外国との交流展については、場所を確保してから話しを進めることになった。
●吹田氏より研究会を学会にするための資料の報告があった。
●昭和56年5月7日、運営委員会、東京芸大にて。外国との作品交流展実現化について、今年はどのような形であっても行なうことにし、そのための方法を話し合う。
●場所は丸の内画廊に小作氏が交渉、中国、フランスとのコンタクトを清水氏が当ることになった。第一会場を大阪フォルム画廊として大学版画展、第二会場を丸の内画廊として、中国、フランスの作品展示を行なう。
●交流展に出品した作品は返送せず、事務局が保管する。作品を買上げされた学生は他に2枚、交流展用に寄贈してもらう旨を学生に伝える。
●昭和56年6月8日、定例連絡会議、女子美大。
女子美大芸術学部長、永井氏のあいさつで始め

▶ 経過報告

られる。

●第6回大学版画展は昭和56年8月3日～8月14日まで東京店大阪フォルム画廊にて、第1回国際交流展は、8月3日～15日まで丸の内画廊にて同時開催されることになった。大学版画展出品校28校、交流展参加校はパリ国立美術学校54点、中国（北京中央、浙江、広州、西安、四川、藩陽魯迅、天津の各美術学院）50点、計104点が出品される。

ポスターは武蔵野美大が制作、大学版画展用と国際交流展用の二種類制作、経費14万円、丸の内画廊が経費を半額負担、案内状も武蔵野美大が担当、一種類で両展を兼ねる。

案内状と共にオープニングパーティー招待状を名誉会員、会員、賛助会員、中国、フランス両国大使館、マスコミ関係に発送する。

●常葉学園短大において大学版画展買上げ作品を日本版画保存会から借り出して、9月10日～9月27日の間、展覧会。

●新入会員紹介ー久保卓治氏（多摩美大）、伊東正悟氏（造形大）、若生秀二氏（造形大）。

●会報についてー8号以降の会報については東京以外の地区（京都）に依頼して発行する。

●会計報告が鎌谷氏より行なわれた。

●大学版画展のアルバムを昨年和光大学で作ったが各大学の資料として大変役立つので、今年は同じ形で作ることに決定、事務局から各大学へ連絡をとり、何部作るかを調べる。

●名誉会員の承諾を出席者全員に計り決定する。

（文責　梅津祐司）

▶ 大学版画研究会会則

第1章　総　　則

第1条　本会は大学版画研究会と称する。

第2条　本会は会員相互の協力により大学に於ける版画教育の進歩発展をはかることを目的とする。

第3条　本会の事務所は大学の版画研究室におく。

第2章　事　　業

第4条　本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行なう。
1. 機関誌、出版その他、研究調査に関する事業
2. 研究協議会の開催。
3. 研究のための専門委員会または部会を設けることがある。
4. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第3章　会　　員

第5条　本会は会員を以って組織する。

第6条　会員は大学に於て版画教育にたづさわる者で入会の手続きを完了した者とする。

第7条　会員は別に定められた会費を納入しなければならない。

第4章　組織及び運営

第8条　本会の事業を運営するために次の役員をおく。
1. 会　　長　　1　名
2. 事務局長　　1　名
3. 運営委員　　若干名

第9条　会長は本会を代表する。

第10条　事務局長は庶務、会計、事務を総括する。

第11条　運営委員は事業、運営の企画を執行に当る。

第12条　本会に名誉会員、相談役、顧問、賛助会員をおくことができる。

第13条　役員は総会において選出する、任期は2年とし再任を妨げない。

第14条　本会の会議は総会、運営委員会、専門委員会とする。
1. 総会は年1回開き、本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。会長は必要に応じて臨時総会を召集することができる。
2. 専門委員会は内容に即して会長が召集し案件の作製、審議に当る。
3. 運営委員会は会長が召集し、本会運営の企画に当る。

第5章　会　　計

第15条　本会の経費は会費及び賛助会費をもってこれにあてる。

附　　則

1. 第7条による会員の会費は年額2,000円とする。
2. 運営のために必要な細則は別に定める。
3. この会則は昭和49年11月3日よりこれを施行する。

▶ 名誉会員名簿

伊藤　廉　大阪府豊中市新千里東町2-4 メゾン千里 D7-901
〒565

小野忠重　東京都杉並区阿佐ケ谷北2-25-16
〒166

末松正樹　東京都世田谷区奥沢2-17-22
〒158

田中忠雄　東京都東久留米市学園町1-14-34
〒180-03

平塚運一　7203 Connecticut Avenue chevy chase MD
7203　20015 USA

福沢一郎　東京都世田谷区砧8-14-7
〒157

松田義之　千葉県市川市平田町1-5-3
〒272

村井正誠　東京都世田谷区中町1-6-12
〒158

脇田　和　東京都世田谷区代田4-14-2
〒155

▶ 会員名簿

阿部　浩　千代田区外神田2-18-7
〒101　TEL 03-251-1474　武蔵野美大

相笠昌義　座間市立野台540
〒228　TEL 0462-54-0279　女子美大

相沢美則　杉並区久我山5-1-22
〒168　TEL 03-334-9521　文化学院

青山光祐　山形市大字七浦497
〒990　TEL　山形大

秋元幸成　滋賀県大津市大谷町24-14
〒520　TEL 0775-25-7927　滋賀大学

朝比奈逸人　大阪府豊中市刀根山4-4 公務員住宅C-311
〒560　TEL 06-853-4269　大阪教育大

有地好登　所沢市上安松221-1
〒359　TEL 0429-44-6538　日　大

東谷武美　埼玉県上福岡市駒林436-3
〒356　TEL 0492-63-4779　一　般

稲田年行　町田市三輪町1939
〒194-01　TEL 044-988-3339　岐阜大

今井治男　金沢市清川町4-10 エバーグリーン犀川405号
〒920　TEL 0762-44-5603　金沢大

伊東正吾　松戸市五香六実
〒270　TEL 0473-86-4340　造形大

梅津　薫　北海道岩見市志分本町3条6-110 志分住宅202-12
〒068　TEL 01262-4-1975　北海道教育大

梅津祐司　板橋区蓮沼7-7 ハスヌマアパルトマン
〒174　TEL 03-965-8918　芸　大

梅沢和雄　大宮市植竹町1-537
〒330　TEL 0486-66-4238　芸　大

奥定孝一　松山市東野立5-1-19
〒790　TEL　愛媛教育大

小野克子　昭島市西武蔵野1388
〒196　TEL 0425-43-0891　女子美大

小作青史　世田谷区羽根木2-32-6
〒159　TEL 03-321-7221　多摩美大

小沼隆一郎　国分寺市本多1-10-21 札ノ丘荘102
〒185　TEL 0423-25-5144　武蔵野美大

小山松隆　千葉県習志野市袖ヶ浦2-6-4-506
〒275　TEL 0474-74-6586　日　大

大本　靖　札幌市中央区円山西町491
〒064　TEL 011-611-0722　北海道教育大

太田　広　神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1-28 C-21号
〒236　TEL 045-371-2561　名古屋造短大

岡部昌生　札幌郡広島町字西の里379-211
〒061-11　札幌大谷女子短大

岡部徳三　神奈川県泰野市渋沢158
〒236　TEL 0463-88-0743　一　般

鎌谷伸一　横浜市金沢区平潟町31-1-814
〒236　TEL 045-781-1872　芸　大

神山泰治　那覇市首里石嶺町4-173-11
〒903　TEL 0988-85-5814　琉球大

河西万丈　山梨県大月市猿橋殿上483-1
〒409-06　TEL 05542-2-6174　都留文化大

河内成幸　多摩市桜ヶ丘4-26-33
〒192-02　TEL 0423-71-4687　多摩美大

加藤れい子　埼玉県狭山市入間川4-25-23 ハウス2008
〒350-13　TEL 0429-53-9174　女子美大

城所　祥　八王子市本町35-6
〒192　TEL 0426-22-5857　武蔵野美大

北岡文雄　杉並区和泉2-27-8
〒168　TEL 03-328-8361　武蔵野美術学園

清塚紀子　板橋区幸町13-5
〒173　TEL 03-955-2300　造形大

木村秀樹　大津市比叡平3-10-5
〒520　嵯峨短大

木村希八　鎌倉市山崎1350-4
〒248　TEL 0467-45-2223　一　般

久保卓治　小金井市梶野町4-11-1
〒184　多摩美大

小林清子　川崎市高津区野川4090の1 野川住宅2の403
〒213　TEL 044-751-0483　女子美大

小林次男　日野市西平山3-6-14
〒191　東洋美術

小林基輝　目黒区洗足2-25-17
〒152　TEL 03-781-9529　女子美大

粂野憲治郎　愛知県愛知郡長久手町長湫下権田104-1 茜荘14号
〒480-11　TEL 05616-2-0978　名古屋造形短大

黒田茂樹　横浜市金沢区六浦町303
〒236　TEL 045-781-4715　東洋美術

斎藤寿一　川崎市幸区塚越3-375
〒210　TEL 044-522-2007　和光大

佐藤逸平　鎌倉市台4-13-12
〒247　日　大

酒井忠臣　福岡県宗像市田熊1254-35
〒811-34　TEL 09403-7-0728　九州産業大学芸術学部

笹本　純　秋田市寺内児桜281-4 児桜住宅1-406
〒011　TEL 0188-33-5261　秋田大

坂田和之　静岡県藤枝市若王子2-14-10
〒426　TEL 0546-43-5921　常葉短大

鴫　剛　大津市御陵町1-3 別所合同宿舎1011
〒520　滋賀大

▶会員名簿

清水昭八	小金井市梶野町4-16-27 〒184　TEL 0423-83-3733	武蔵野美大
島田章三	愛知県愛知郡長久手町芸大公舎J号 〒410-01 TEL 05616-2-0885	愛知芸大
白木俊之	茨城県桜村吾妻2-815-5 〒305　TEL 0298-52-0710	筑波大
園山晴已	世田谷区駒沢2-59-5 〒154	一般
田村文雄	小平市学園西町2-12-8 〒187　TEL 0423-43-7282	女子美大
武市　勝	山口県吉敷郡小郡町大正中1627-2 〒754	山口大
高橋貴和	宮城県名取市名取ヶ丘5-1-1 〒981-12	一般
高山　登	仙台市荒巻字青葉 宮城教育大学 職員宿舎1-45 〒980　TEL 0222-25-0386	宮城教育大
滝沢光広	愛知県一宮市大和町代永1219 〒491　TEL 0586-44-3330	名古屋造形短大
津地威汎	徳島市中吉野町3-11-3 〒770	徳島大
嶝野寿蔵	愛媛県伊予市灘町4丁目 〒799-21	一般
中林忠良	埼玉県上福岡市駒林437 〒356　TEL 0492-63-1970	芸大
野沢博行	刈谷市東境町児山79 野々山方 〒448	愛知教育大
野田哲也	小金井市本町3-14-14 〒184　TEL 0423-81-9371	芸大
長谷川光輝	鎌倉市二階堂851 〒248　TEL 0467-25-1459	日大
馬場　章	川崎市高津区宮崎1-5-23 峰尾ビルB-203 〒213　TEL 044-855-8217	女子美大
馬場檮男	横浜市金沢区富岡町1197-186 〒236　TEL 045-772-1770	造形大
萩原英雄	中野区上高田5-33-8 〒164　TEL 03-386-0192	学芸大
橋本文良	京都市北区紫竹西北町33-12 〒603	京都精華大
浜西勝則	泰野市千村742-151-508 〒259-13 TEL 0463-87-3779	東海大
原　健	世田谷区野沢3-13-12 〒154　TEL 03-421-2980	造形・日大
平川晋吾	宇都宮市峰町350 〒150	宇都宮大
広畑正剛	世田谷区赤堤3-5-2 〒156　TEL 03-324-0532	玉川大
深沢幸雄	千葉市鶴舞308 〒290-04 TEL 043-688-2034	多摩美大
福岡奉彦	狭山市入間川4-25-23 ハウス2006 〒350-13 TEL 0429-53-7027	武蔵野美大 女子美大
吹田文明	世田谷区砧3-33-4 〒157　TEL 03-417-7123	多摩美大
深草廣平	佐賀市本庄町西寺小路884-3 〒840　TEL 0952-24-5191	佐賀大
細田政義	世田谷区祖師ヶ谷3-39-8 〒157　TEL 03-482-3052	女子美大
堀井英男	八王子市宇津木町940-79 〒192　TEL 0426-45-3756	創形
前川　直	岩手県盛岡市茶畑1-1-6 グリーンビレッジ C-411　〒192-03	岩手大
舞原克典	宇山市川田町1548-13 〒524　TEL 07758-3-0028	京都芸大
松川幸寛	狛江市宕戸北4-1-1 土屋方 〒201　TEL 03-488-4967	松本短大
松浦　昇	岐阜県大垣市上面二丁堤唐 〒503	大垣女子短大
松島順子	大田区田園調布4-29-25 〒145　TEL 03-721-3062	女子美大
松本　宏	神戸市東灘区渦森台3-19-7 〒658　TEL 078-841-7336	神戸大
丸山浩司	練馬区桜台6-8-13 〒176　TEL 03-992-4020	芸大
馬渕　聖	神奈川県茅ヶ崎市芹沢2511 〒253　TEL 0467-51-1497	一般
皆川孝一	東久留米市神宝町1-8-8 〒180-03	日大
宮田克人	高知県高知市小津町10-41-532号 〒780	高知大
宮下登喜雄	府中市新町1-12 〒183　TEL 0423-61-5634	福岡教育大
村上文生	京都市右京区太秦原面影町6-1 〒616	嵯峨短大
望月詩子	西多摩郡五日市町伊奈810-4 〒190-01 TEL 0425-96-1215	一般
山下哲郎	福岡市東区香住ヶ丘2-23-11 〒813	九州産業大芸術学部
山田節子	加古川市平岡町新在家2301 〒675-01	兵庫女子短大
山中　現	北区田端1-13-23 〒114	芸大
山野辺義雄	町田市広袴443-10 〒194-10 TEL 0427-34-5117	東海大
山本文彦	茨城県新治郡桜村天久保 芸術専門学郡内 〒300-31	筑波大
山本富章	愛知県愛知郡長久手町岩作三ヶ峰1-1 芸大第3住宅3-5 〒480-11 TEL 05616-2-7526	愛知芸大
吉田　東	福岡市南区大字塩原226 〒815　TEL 092-541-1431	九州芸工大
吉原英雄	大阪府高槻市塚原6-6-266 〒569　TEL 0726-96-2286	京都芸大
吉田穂高	三鷹市井ノ頭1-13-40 〒181　TEL 0422-44-3923	女子美大
吉本　弘	愛知県愛知郡日進町岩崎元井ゲ17-97 〒470-01 TEL 05617-2-3565	愛知芸大
若生秀二	日野市旭ヶ丘1-20-19 泰山荘C-201 〒191	造形大
渡辺達正	調布市上石原2-20-1 箕輪コーポ201号 〒182　TEL 0424-87-9476	多摩美大
渡辺　満	相模原市橋本5-25-5 〒229	多摩美大
渡辺明信	文京区向ヶ丘1-2-5 〒113　TEL 03-813-9050	文化学院
廖　修平		一般

▶ 賛助会員名簿

新日本造形	中野区新井1-42-8 〒165　TEL 03-389-1221
サクラクレパス	千代田区神田三崎町3-1-16 〒101　TEL 03-263-4221
ヌーベルセンター	千代田区神田三崎町3-1-16 クレパスビル内ヌーベル 〒101　TEL 03-262-4221
大阪フォルム画廊	中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階 〒104　TEL 03-571-0833
日本版画保存会	川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方 〒214　TEL 044-911-9041
渡辺木版美術画舗	中央区銀座8-6-19 〒104　TEL 03-571-4684
山田商会	中央区八重洲5-5 〒104　TEL 03-281-1667・8538
レッドランタン版画舗	京都市東山区新門前通り仲之町236 〒605　TEL 075-561-6314
萩原市蔵商店	千代田区神田紺屋町43 〒101　TEL 03-256-3591
芸大画翠	台東区上野公園12-8 東京芸術大学内 〒100　TEL 03-821-7056
光村団書出版	品川区上大崎2-19-9 〒141　TEL 03-493-2111
ペンテル	千代田区東神田2-1-6 〒101　TEL 03-866-6161
マルチプルアートセンター（乃村工芸）	港区芝浦4-6-4 乃村工芸社 〒108　TEL 03-455-1171
ギャラリーカプセル	中央区銀座8-16-10B401 堀江強志 〒104　TEL 03-541-4676
びけん（本店）	世田谷区尾山台3-33-5 〒158　TEL 03-702-2118
梶原商店	渋谷区上原2-33-8 〒151　TEL 03-466-6117
文房堂	千代田区神田神保町1-21 〒101　TEL 03-291-3441
日動画廊	中央区銀座5-3-16 〒104　TEL 03-571-2553
画荘ヴィナス	新宿区西新宿1-15-13 胖ビル内 〒160　TEL 03-346-2728
画箋堂	京都市下京区河原町五条上ル 〒600　TEL 075-791-6131
クラタ商店	大阪市鶴見区茨田諸口町1118 〒538　TEL 06-911-6561
酒井民雄	大垣市郭町3丁目 酒井書店 〒503
菊田商店	文京区本駒込3-8-2 〒113　TEL 03-821-7131
横田嘉雄	横浜市旭区金ガ谷781-13 〒241
武蔵野美術学園	武蔵野市吉祥寺東町3-3-7 〒180　TEL 0422-22-8171
シロタ画廊	中央区銀座7-10-8 高橋ビル地下1階 〒104　TEL 03-572-7971～2
養清堂画廊	中央区銀座5-5-15 〒104　TEL 03-571-2471
阿部出版版画芸術	目黒区上目黒4-30-12 〒153
日本オリビエ	港区赤坂1-1-2 フランス銀行ビル内 〒107　TEL 03-582-0871

（順不同）

▶ 編集後記

編集スタッフの諸事情により、一年振りの発行となりましたことをお詫び申し上げます。したがって経過報告は研究会の一年間の公式記録として大分頁をさいて詳しく載せました。

メインテーマである大学における版画教育の問題点、カリキュラム等の重要課題はより長い目で検討を続けていかなければならない問題ですが、今回は、版画考、好評の小山松隆氏の和紙研究シリーズ、芸大版画研究室によるヨーロッパ美術研究の旅行記など版画に関する全体的な視点で編集しました。

版画スクランブルも多方面からの資料収集を行ない、より充実していきたいと思います。

研究会のイベントである大学版画展は今回第一回国際交換展（フランス、中国）も加わり、中国よりのメッセージも届けられ、また常葉学園短大による過去の選抜展（買上げ保存作品）も合せもっと会報で取り上げていっても良いと思われます。

第10号より会報編集を京都芸大の先生方にお願いすることが決りました。新しい視点からより一層充実した会報ができることを期待しております。

原稿の執筆を依頼した先生方にはご多忙中にもかかわらずご協力頂きまして感謝致しております。

なお、研究会、会報等にご意見がありましたら事務局までお寄せ下さい。

大学版画研究会　会報 第8号　1981年8月
編集スタッフ一同

大学版画研究会　会報第8号　1981年8月

編集スタッフ　福岡奉彦／田村文雄／小林基輝
発　　行　大学版画研究会
印　　刷　新日本造形株式会社・有限会社西川

文房堂の版画材料
（木版・銅版・石版）
資料をご請求下さい
東京都千代田区神田神保町１－21　TEL（03）291－3441（代）

サクラ版画絵具
株式会社サクラクレパス

良い版材は良い地金
版画用・銅板・亜鉛板・リト用・ジンク板・アルミ板
有限会社　萩原市蔵商店
東京都千代田区神田紺屋町43番地
電話 東京（256）３５９１番（代表）

版画科　1年修　石版・銅版・木版
武蔵野美術学園
武蔵野市吉祥寺東町3-3-7

石版画用ジンク研磨
版画用材料専門店　クラタ商店
大阪市鶴見区茨田諸口町1118
TEL 06－911－6561

洋画・デザイン材料・額縁・石膏像・版画
株式会社　画荘ヴィーナス
本　店　〒460　名古屋市中区新栄町３－６
TEL 〈052〉 961－0591（代）
東京営業所　〒160　東京都新宿区西新宿１丁目15－13
TEL〈03〉346 － 2728（胖ビル内）

株式会社　梶原商店
東京都渋谷区上原２丁目33番８号
電話（466）6117（代表）

現代版画
銀座ギャラリー
カプセル
〒104　東京都中央区銀座８－16－10 B401
TEL　541－4676

画材の専門店 びけん
版画材料
●本店・世田谷区尾山台3-33-5　TEL 702-2118
●多摩美術大学売店・八王子市鑓水1723　TEL 76-6636
●八王子市三崎町2-13　TEL 25-5221

創業53周年
日動画廊
東京都中央区銀座７－４－12
電話（571）２５５３（代表）

ぺんてる
エフ水彩（不透明水彩）
CRAYON
ぺんてる株式会社

NOUVEL
ヌーベル アーチスツ油絵具
ヌーベル エチュード油絵具
ヌーベル 画用液
ヌーベル ポスターカラー
ヌーベル ドローイングインキ
ルフラン 油絵具
ルフラン 画用液
ラウニー 画筆
SAKURA COLOR PRODUCTS CORP.
東京都千代田区三崎町3-1-16　クレパスビル ヌーベルセンター
〒101　TEL 東京03（263）4221（代表）
大阪市東成区中道1丁目10-17　サクラビル ヌーベルセンター
〒537　TEL 大阪06（972）1241（代表）

画　翠
東京都台東区上野公園
芸術大学内　☎（821）7056

養清堂画廊
中央区銀座5-5-15　でんわ 571-2471

小・中・高一貫した教科書編集
光村図書出版株式会社
東京都品川区上大崎2-19-9　TEL（493）2111

〈現代版画とマルチプル彫刻〉
株式会社 乃村工藝社
マルチフル・アート センター
東京都港区芝浦４丁目６番４号／（03）455-1171

大阪フォルム画廊

東 京 店 東京都中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階
TEL 03－571－0833

名古屋店 名古屋市中区新栄町1-1 明治生命ビル15階
TEL 052－962－5811

版画専門メーカー

新日本造形（株）

東京本社 〒165
東京都中野区新井1の42の8 TEL 03-389-1221

大阪支社 〒540
大阪市東区森ノ宮中央1の6の20 TEL 06-943-1141

日本版画保存会

川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方
〒214 TEL. 044-911-9041

大学版画研究会

事務局　東京芸術大学版画研究室
〒110　東京都台東区上野公園内　TEL. 03 (828) 6111 (代)　内線337番